

はじめに

青年期の自己形成は様々な他者との関わりを通して進む。しかし、階層化・格差化が進む現代の日本社会では、他者関係の量や質についても社会的な規定性を大きく受け、階層化されている。その結果、若者の自己形成といっても、一律に論じることはできず、したがって育成支援の課題を考える際には、若者としての共通性とともな階層格差として現れた本質的問題の解消を視野に入れる必要がある。

ここでは、このような視点から、他者関係（つながり）のあり方と若者の自己形成の関連に焦点を当てていくつかの論点を提起したい。

1. 若者の他者関係の特徴

1-1 つながり格差の状況

P.29 から P.43 までの性別・年齢別の集計結果を見れば、若者の他者関係（つながり）の現状について、以下のような特徴を指摘できる。

①家族との関わりは、男性の場合は年齢とともに薄れていくのに対し、女性の場合は維持されるか場合によっては強くなっている。20代後半になると、両者の差は10ポイント以上に開く。

②学校で出会った友人との関わりは、性別を問わず年齢とともに減少するが、学卒後にこの関わりが減少するのは当然のことであろう。それに代わって、職場での関わりが増加することが予想されるが、前者の減少分を補うほどには増えていない。特に女性の場合は、「強いつながりを感じる」他者や「本音を話せる」他者あるいは「何でも悩みを相談できる」他者を職場で得ることは男性よりも難しい傾向が確認できる。

③地域でのつながりは、全般的に希薄であり、かつ年齢とともに減少する傾向がみられるが、20代後半の女性の場合には微増している。これは専業主婦層の地域とのつながりを反映しているものと思われる（例えば、専業主婦のうち、地域に対して、困ったときは助けてくれると思う者は25.1%、楽しく話せる時があると思う者は30.4%）。

④インターネット上の他者との関わりは、全般的に希薄であり、女性の場合は年齢とともに減少する傾向がみられるが、男性の場合は年齢を問わず4人に1人程度の者がインターネット上の他者と強いつながりを持っている。

1-2 他者との関わり方の類型

このような他者関係が若者の自己形成にとって持つ意味を考えるために、他者関係を暫定的に類型化してみよう。回答傾向の相関を見れば、他者との関わりは大きく4タイプに区分できる（表1）。第一は、「楽しく話せる時がある」に示されるような共感的な他者関係である。当該集団に属することが大きなストレスにならないような状況を推測してよいであろう。第二は、「困ったときは助けてくれる」という相互扶助性をもった他者関係である。ここには共有された規範に基づく信頼も、個人としての他者に対する信頼も含まれる。自らの存在がフォーマル・インフォーマルにも無視されていない状況を推測してよいであろう。第三は、個人の日常を共有する他者である。「会話やメールをたくさんしている」と「強いつながりを感じている」はほぼ同じ回答傾向であり、この両者は諸個人の日常性、あるいは自己を構成する他者を表現するカテゴリーと言える。

その領域は共感的他者関係や相互扶助的他者関係よりも限定される。第四は、「何でも悩みを相談できる人がある」と「他の人には言えない本音を話せることがある」に示される親密な他者である。この両者の回答傾向も一致している。以上の四類型は自己を構成する他者関係の階層構造を現していると言ってもよいであろう。

表 1：類型別他者関係の場ごとの分布（％）

				場の種別					
				家族親族	学校の友人	職場の友人	地域の人	ネット上	
他者関係の類型	共感的他者	楽しく話せる時がある	男	75.6	73	54.8	29.9	36.9	
		楽しく話せる時がある	女	86.6	80.9	62.2	25.4	38.1	
	相互扶助的他者	困ったときは助けてくれる	男	74.9	60.9	48.8	29.7	24.0	
		困ったときは助けてくれる	女	81.9	69.1	52.2	23.0	19.4	
	日常共有的他者	強いつながりを感じている	男	67.5	58.2	35.0	24.6	24.4	
		強いつながりを感じている	女	71.9	60.9	28.2	15.5	19.1	
	親密な他者	何でも悩みを相談できる人がある	男	56.4	54.0	33.9	22.7	23.9	
		何でも悩みを相談できる人がある	女	63.2	61.5	28.6	13.4	18.5	
	(参考:居場所感あり)				79.8	49.2	39.3	58.5	62.1

* 網掛けは女性のほうが、数値が高い項目を示す。

以上の類型と先にみたつながり格差の状況を重ねると、男女ともに年齢を重ねるにつれて共感的他者や相互扶助的な他者は職場を中心に構成されるようになるものの、女性は日常を共有する他者や親密な他者を家族に求める傾向が微増し、自己の基盤としての家族の重みが相対的に増すのに対し、男性の場合は、それらを職場で出会った友人に求める傾向があり、自己の基盤を職場に移し始めると言える。

2. つながりの社会構造

2-1 つながりの社会的背景

このような現象には、社会的格差が反映している。回答者の属性を見ると、男性回答者の 28.6% が正規労働者であるのに対し、女性回答者におけるその比率は 17.7%にとどまっている。反対に、非正規労働者は男性の 12.6%を占めるに留まるのに対し、女性の場合は 19.6%を占めている。つまり、学卒後の男性回答者は正規労働者が多数派であるのに対し、女性は非正規労働者のほうが多数を占めている（ちなみに今回、正規労働者として回答した者の男性比率は 62.8%、非正規労働者としての回答者の女性比率は 59.9%）。

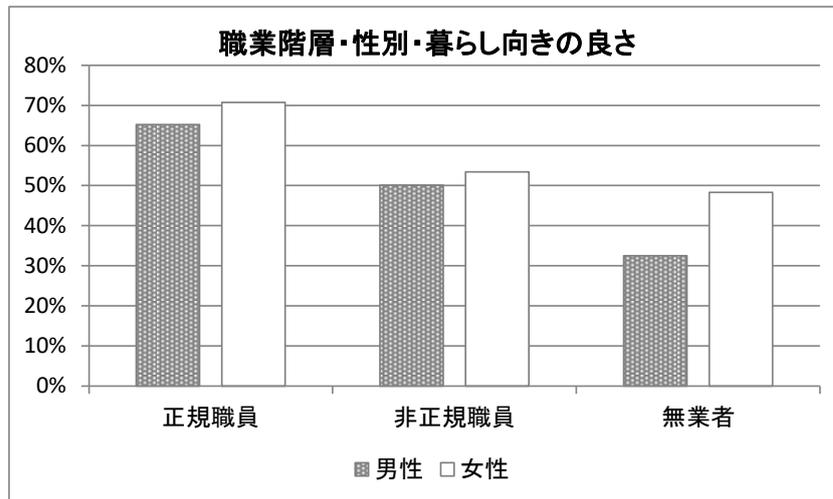
このような職業階層の差異は、暮らし向きの差異に結び付くので、他者関係の性別差異は、ジェンダーバイアスと職業格差・経済格差という複合的要因が合成された結果と言える。職場での地位と収入において劣位に置かれた女性は、社会的に排除された結果として家族に自己形成の基盤を求めざるを得なくなっているとも言えよう。片や無業者の 58.0%は男性であり、男性に対する社会的排除の帰結の一つが無業者状態であることをここでも確認できる。

2-2 経済的階層の規定性

他者とのつながりに及ぼす経済格差の影響の大きさは以下の諸指標からも読み取れる。

①職業階層の差異は、暮らし向き（≒経済階層）に直結する。正規労働者のうち、暮らし向きが「良い」（良い+どちらかと言えば良い）者は6割から7割に達するが、非正規労働者の場合は、5割前後に減少し、無業者の場合は男性で3割、女性で5割弱である。なお、同一階層の中では女性のほうが「良い」とする者がやや多い。

図1 職業階層別・性別にみた暮らし向きの「良い」比率



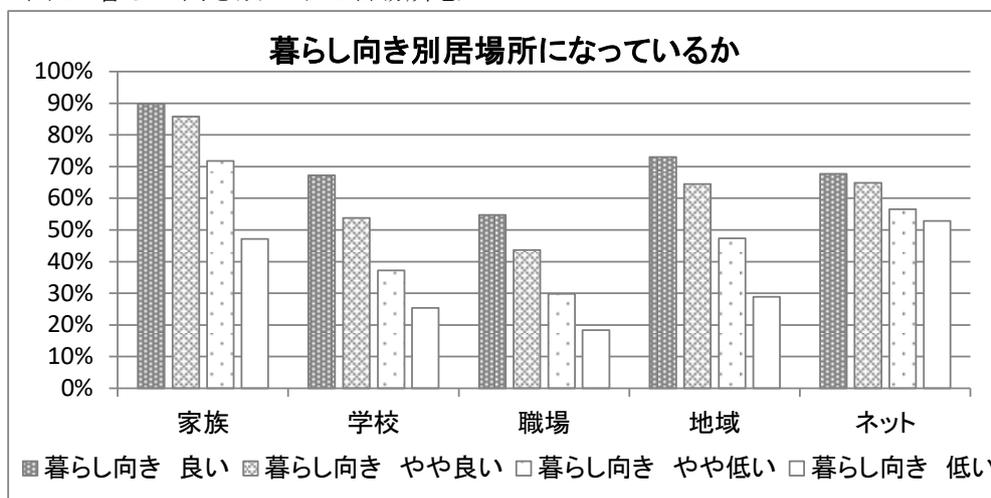
*なお、学生を除く回答者の暮らし向き別にみた職業階層は以下の通りである。

図2 暮らし向き別職業階層構成

		正規	非正規	専業主婦	無業者	その他	合計
暮らし向き	良い	56.0%	21.9%	10.8%	8.0%	3.3%	100
	どちらかと言えば良い	47.1%	27.1%	13.4%	10.6%	1.8%	100
	どちらかと言えば低い	34.1%	31.5%	14.3%	18.3%	1.8%	100
	低い	23.2%	35.1%	6.9%	32.2%	2.5%	100

②暮らし向きの差異は、つながり・居場所感のほぼすべての項目と相関している。例えば、家族・学校・職場・地域を居場所と感じる者は、暮らし向きが良いほど多くなる。

図3 暮らし向き別にみた居場所感



但し、インターネット空間を居場所と感じる者については暮らし向きの変異による規定性がそれほど大きくはなく、暮らし向きが低い場合であっても精神的な拠り所になる可能性があるともいえる。

暮らし向きの変異は、他者関係の質にも反映している。ここでは家族・職場・ネット空間における他者関係のみを例示したが、そのいずれにおいても、他者関係の濃淡（量と質）は暮らし向きと相関している。すなわち暮らし向きが良い場合は、日常共有的他者や親密な他者との関わりが相対的に多いのに対し、暮らし向きが低くなるとそのような他者との関わりを持つことが難しくなる。その結果、共感的な他者との関わりにおける暮らし向きの階層間格差（良い者と低い者の間の開き）は、親密な他者との関わりにおいては拡大しており（例えば、家族に即しては前者での約 1.7 倍の開きが後者では約 2.5 倍に拡大）、自己を構成する資源としての他者関係の格差が顕著になっている。

図4 暮らし向き別にみた家族での他者関係

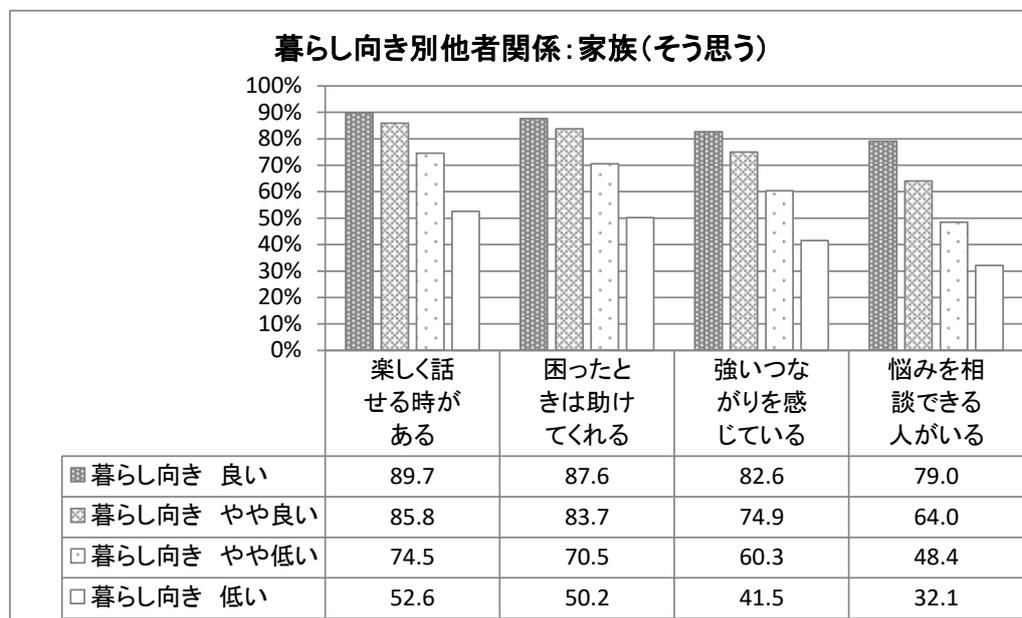
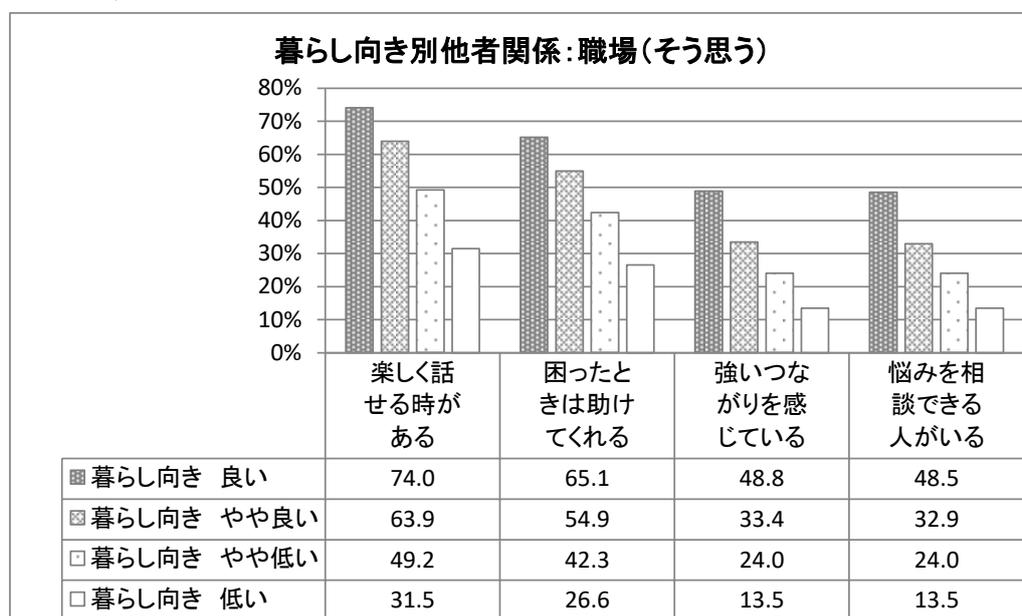
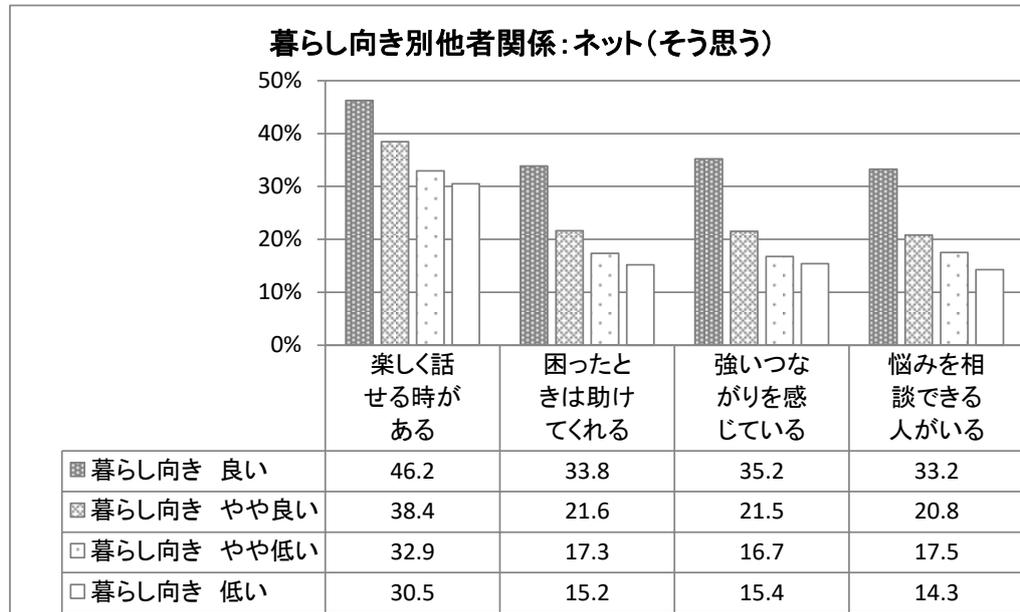


図5 暮らし向き別にみた職場での他者関係



このような傾向は、暮らし向き別の居場所感の格差が相対的に少なかったインターネット空間においても確認できる。暮らし向きが低い場合に、インターネット空間で親密な他者を見出せる者は7人に1人しかいない。インターネット空間では、たとえ居場所感があっても、自己を構成する核心に位置するような他者関係は築き難いことが示されている。

図6 暮らし向き別にみたインターネット空間での他者関係



以上から、共感的他者から親密な他者までの4つのタイプは、自己を構成する他者関係の質的差異を示すと理解してよければ、暮らし向きの格差は、他者関係の量的・質的格差を介して、自己の安定性の格差を生み出していると言えるであろう。

3. 社会関係の拡張可能性

3-1 居場所の有無と他者関係の質

以上から推察できるように、ある場所を居場所と感ずることができる場合、インターネット空間を除けば、そこでの他者関係の量と質は豊富である。例えば、図では示していないが、家庭や学校を居場所と感ずる者は家族との共感的・相互扶助的・日常共有的で親密な他者関係を保持している。少なくとも学校と家族については、居場所感が高まることは自己形成の基盤が堅固になることを意味する。

その一方で、職場については、親密な他者との関わりは、職場を居場所と感ずる者でも5割前後に留まり、自己形成の基盤としての限界を示しているが、それでも居場所感の高低と他者関係の量と質についての相関は同様に見られる(図示省略)。

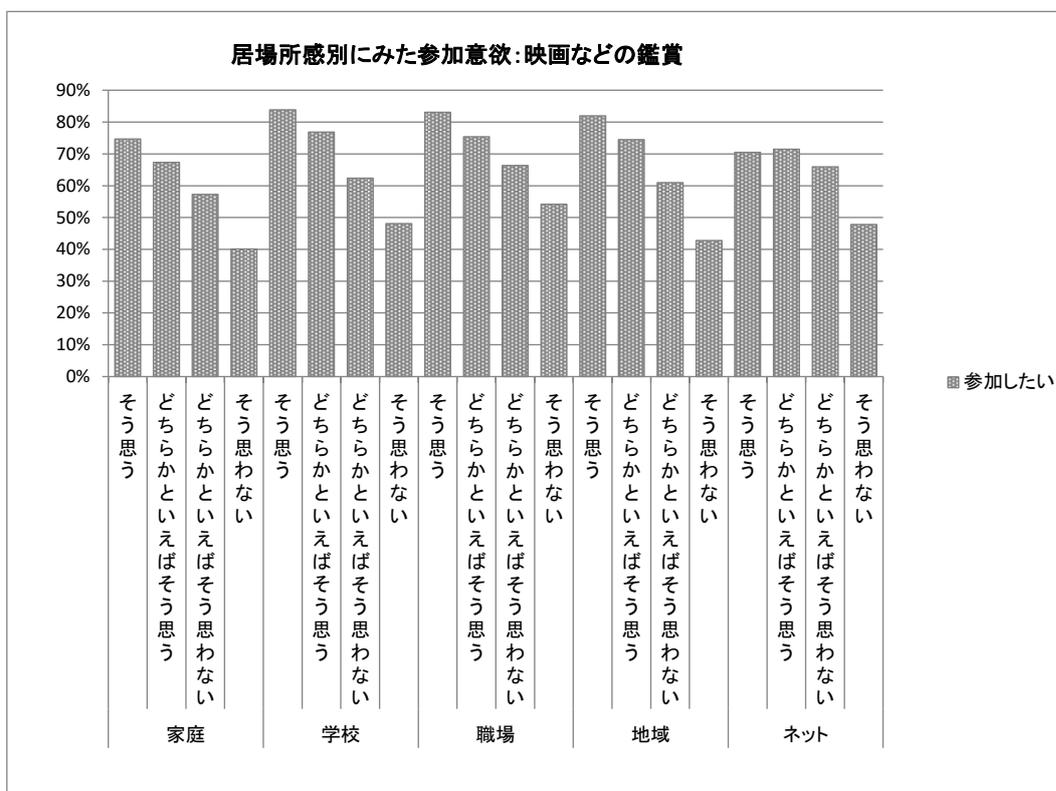
地域とインターネット上の空間については、そこに意味ある他者関係を見いだせない者が5割を超えているが、職場と同様に、居場所と感ずる者と意味ある他者関係を見出す者との相関は確認でき(図示省略)、ここにこれらの場所を意味ある他者関係を生み出す場にするための手があるように思われる。

3-2 つながりの創出可能性

一般に他者との関係（つながり）の創出や深化は、他者との何らかの活動を通して生まれる。居場所感と他者関係の関連は、その場で展開する活動への参加の仕方によって規定されると考えてよいであろう。今回の調査では、個々の場で展開する活動に即した設問はないが、学校・職場以外での活動に対する意欲（Q24）をみると、居場所感の有無あるいは高低によって活動への参加意欲は大きく左右される傾向を確認できる。例えば映画等の鑑賞は、学校・職場・地域に居場所感を感じる者では、行いたいとする者が8割前後に達しているが、反対にそれらの場を居場所として感じない者では、意欲を持つ者は4〜5割にとどまっている。

その一方で、図2で確認したように、各場所に対する居場所感の高低は、暮らし向きと密接に関わっていた。この点に鑑みれば、経済格差は他者と関わる活動への意欲の格差を生み、他者との関係の量と質の格差を生み出していると言えるであろう。

図7 居場所感別にみた参加意欲：映画などの鑑賞



3-3 自己像

他者関係の四類型は自己のありかたに関わるとすれば、経済格差（暮らし向き）は他者関係のあり方を介して、若者の自己像や将来展望にも影響をおよぼす可能性がある。

家庭・学校・職場における他者関係と自己認識との関係を「他者に対する対応」（Q30）「自己診断」（Q31）に即してみると、他者関係が良好（楽しく話せる・助けてくれる・強いつながりがある・悩みを相談できる）と回答した者の間では、自己認識に大きな差異は見られなかったが、他者関係について否定的な回答をした者については、次の図8・9・10のような傾向が見られた。

なお、階層は以下のように設定した。「楽しく話せる時がある」に「そう思わない」と回答した者は、共感的な他者関係を欠くため、他者関係に階層性があるとすればそれ以上の深い他者関係は持ちえないと想定されるため、最も厳しい他者関係の下に置かれているグループと見なした。その対極に位置するのは、「何でも悩みを相談できる人がいる」との問いに「そう思わない」と回

答したグループである。このグループは親密な関係は持っていないものの、その他の3種類の他者関係は持っている可能性のあるグループである。したがって、この図は何らかの意味で他者関係を欠く者（＝親密な他者関係を持つ者を除いた者）の中で、それが最も脆弱な層から安定性が相対的に高い層の間での自己認識の変化を示すことになる。

自己認識の指標としてはQ30の「誰とでもすぐ仲良くなれる」、「その場に合った行動がとれる」、「表情が豊かである」の三項目およびQ31の「今の自分が好きだ」を用いた。これらは社交性、他者との協調性、自己表現および自己肯定感に関わる設問である。

図8 家庭の他者関係別自己認識

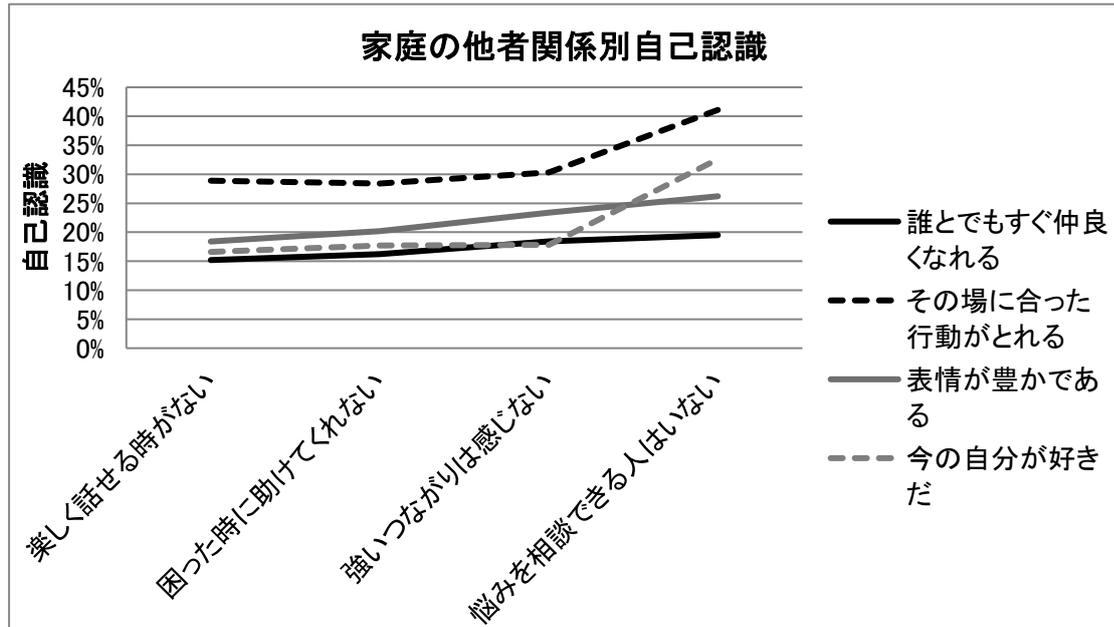


図9 学校での他者関係別自己認識

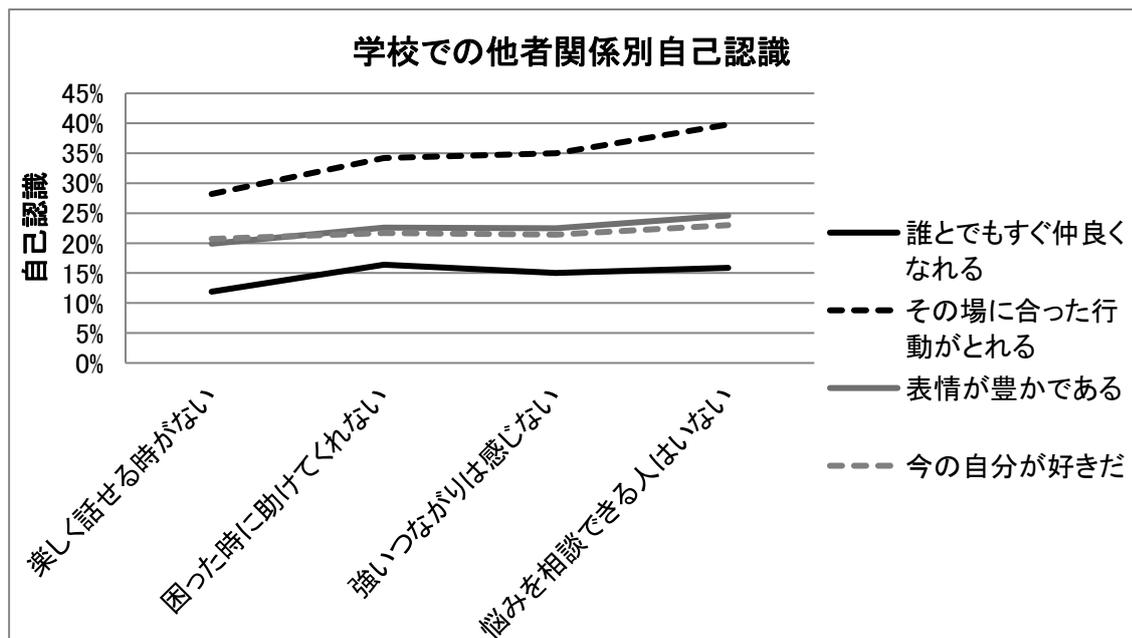
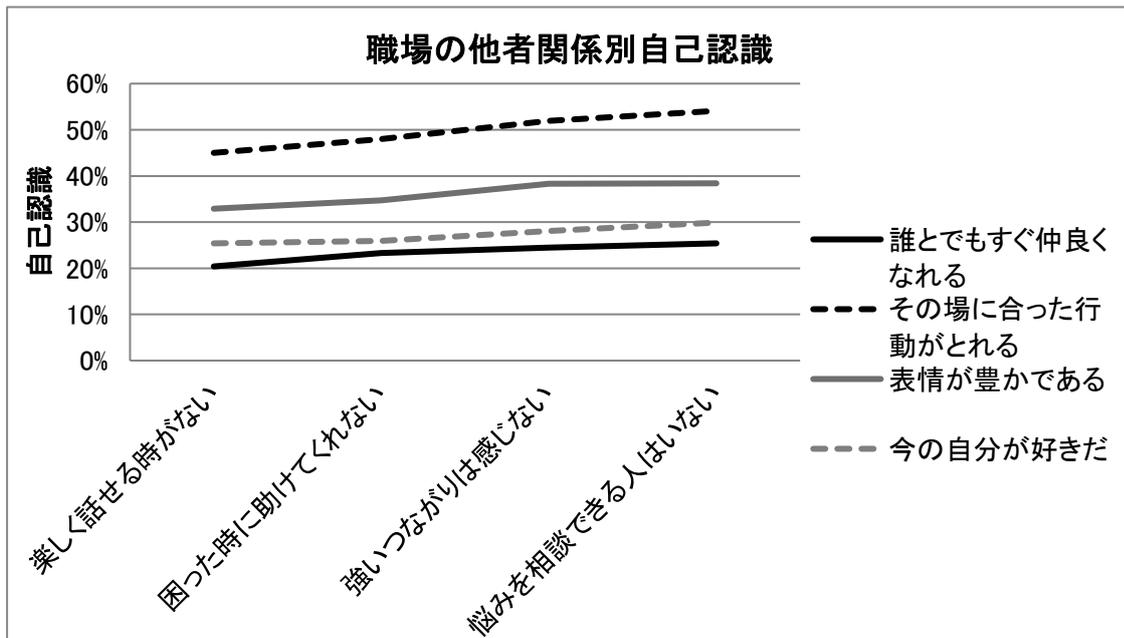


図 10 職場での他者関係別自己認識

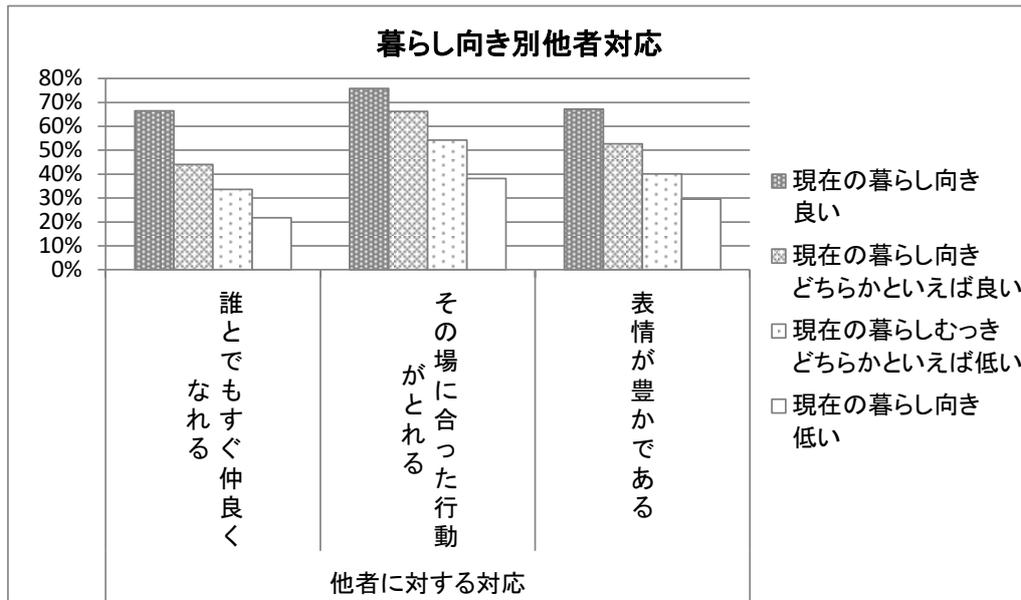


3つの図を見る限りでは、協調性（その場にあった行動がとれる）、自己表現（表情が豊かである）、社交性（誰とでもすぐ仲良くなれる）には、職場での自己形成基盤の安定性が最も作用しているように思われる。自己肯定感（今の自分が好きだ）は全般的に低く、とりわけ家庭で悩みを相談できる親密な他者関係を持たない場合は、2割に満たない。他方で、職場での他者関係の改善は僅かながらも自己肯定感の向上と結びつくと言える。

既にみたように、他者関係と暮らし向きの間には相関がみられる。その結果、次の図 11 のように、暮らし向きと他者対応に関わる自己認識の一部には相関がみられる。良好な暮らし向きに支えられて量質ともに豊かな他者関係を持つ者は、社交性・協調性が高く、自己表現も豊かであると言えそうである。逆に、暮らし向きが厳しい場合は、他者との交流やコミュニケーションに困難を感じる者がその多くを占めていると見るべきであろう。

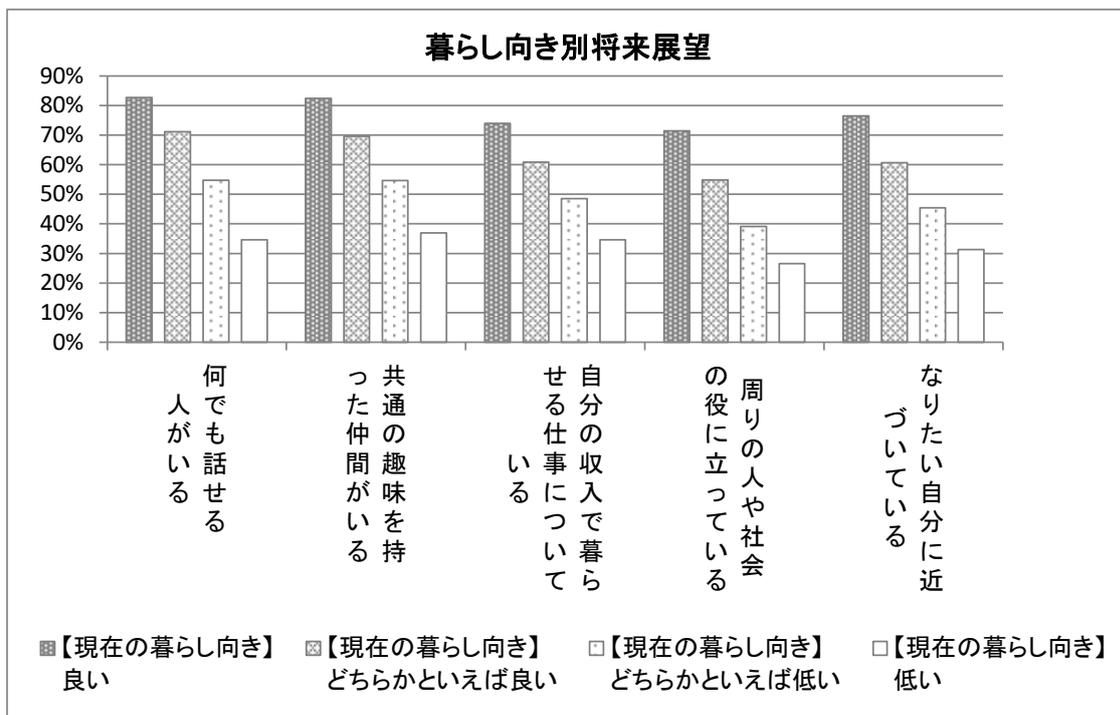
但し、これ以外の項目（表情やしぐさで相手の思っていることがわかる、等）ではそれほど明確な階層差は確認できず、ここで扱ったものとは別の要因が大きく作用していると思われる。

図 11 暮らし向き別他者対応に関する自己認識



将来展望についても同様の傾向を確認できる。暮らし向きの良い者は、現在でも先に見たように家庭・学校・職場で豊かな他者関係を保持していたが、将来についても親密な他者がいて共に活動する可能性のある仲間を持ち、経済的にも自立し、社会的に承認されるという自己像を7~8割の者が描いている。反対に、暮らし向きの低い者では、そのような将来の自己像を描ける者は3割前後しかいない。「なりたい自分」という理想の自己に接近できるという確信が自己に対する信頼や希望をもたらすとすれば、暮らし向きの格差として現象する貧困は自信や希望をも剥奪すると言ってよいであろう。

図 12 暮らし向き別将来展望



そのメカニズムは、自己認識のあり方に即して確認したものと同様である。暮らし向きは、他者との客観的な関係性の量と質を規定する。そして他者との関係性は自身の将来像を規定する。以下の3つの図は、図8・9・10と同様に、自己形成の基盤の安定性の差異に即して自己の将来像について確認したものであるが、ここでも職場での他者関係の持つ影響力の大きさを確認できる。併せて、「周りの人や社会の役に立っている」という自己有用感については、信頼できる他者との関係がない場合は、簡単には向上しないことも確認できる。図には示していないが、職場で「悩みが相談できる人がいる」者の場合は、「役立っている」という将来像を描く者は81.8%に達する。職業階層に即してみれば、正規職員の場合は55.4%であるのに対し、非正規職員では36.9%にとどまり、無業者の場合は22.9%しかない。自己有用感自己肯定感の不可欠の要素であるが、それがなくままに自分への信頼を高めることや将来への希望を持つこと、さらには社会に対する信頼を持つことは難しいと言わざるを得ない。自己形成の過程にある若者たちが置かれている格差化された社会構造は、きわめて厳しいものであることを認識する必要がある。

図13 家庭の他者関係別にみた将来の自己像

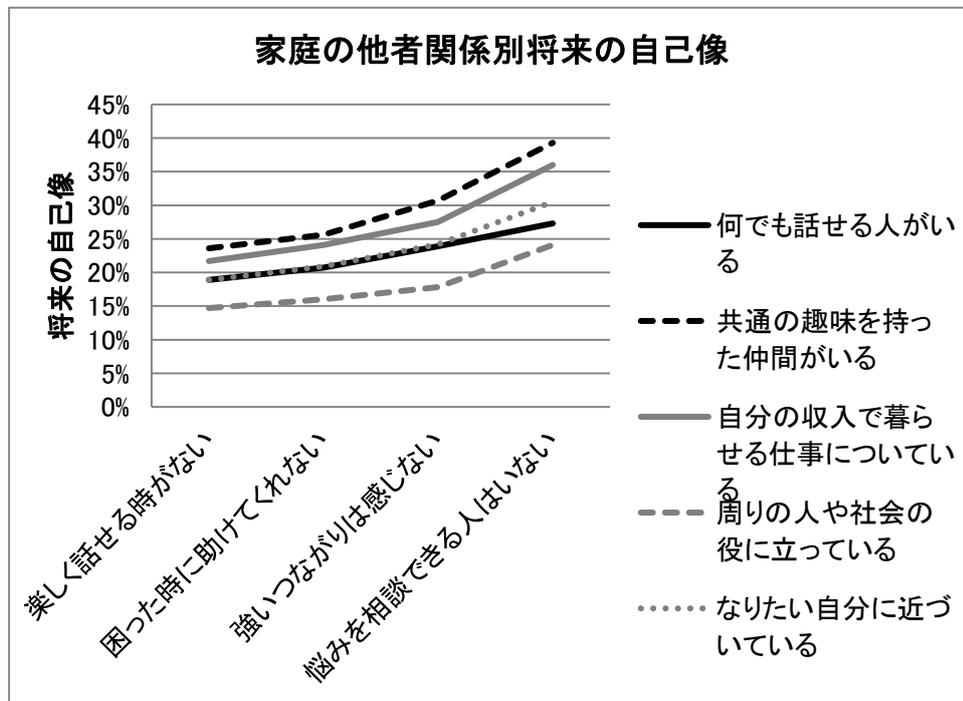


図 14 学校の他者関係別にみた将来の自己像

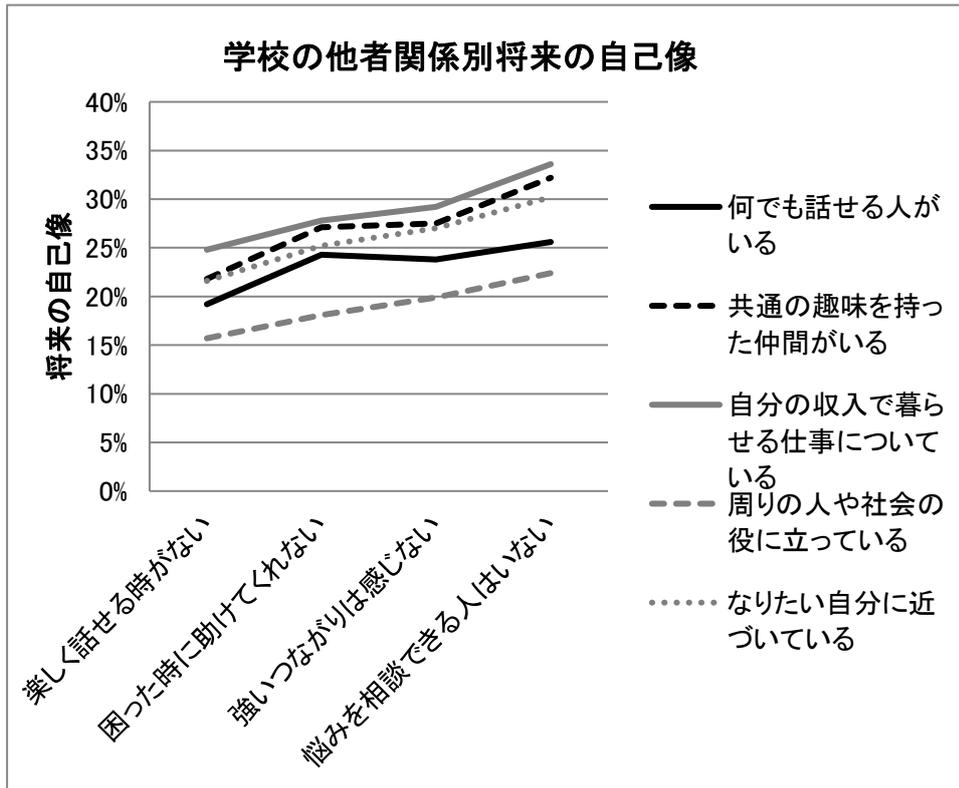
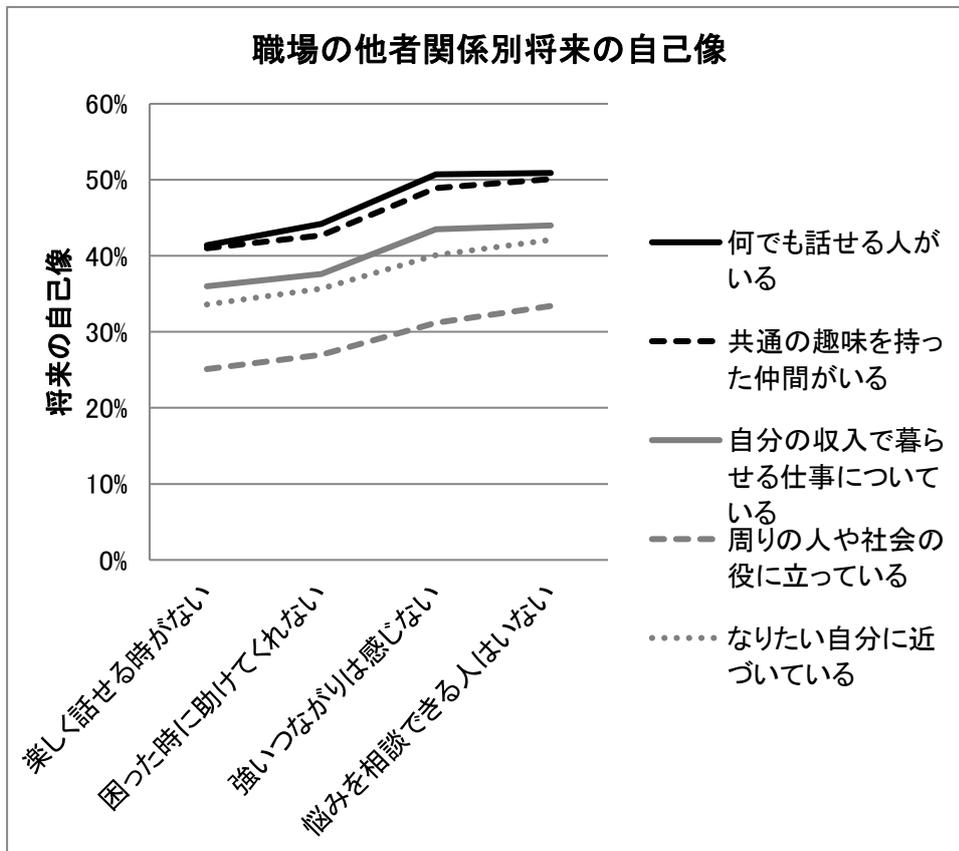


図 15 職場の他者関係別にみた将来の自己像



4. つながり形成のための支援課題

4-1 つながり形成の可能性

他者とのつながりは他者と共に行う何等かの活動を通して生まれることに鑑みれば、Q24（他者とともに行ってみたい活動）は、つながり形成の可能性が高い活動領域を示すといってもよいであろう。過半数の回答者が参加意欲をもつ鑑賞(66.9%)・観光(65.7%)・自然体験(53.9%)・スポーツ(51.8%)に加えて、地域行事も45.3%の支持を得ていることに注目しておきたい。

ここでもまた暮らし向きへの差異が参加意欲に及ぼす影響は極めて大きい（図16）、併せて家庭の文化的環境も考慮すべき要因である。図17は母親の学歴別の各活動への参加意欲を見たものであるが（ここでは高等学校卒業と大学卒業のみを示した）、母親が高学歴の場合の参加意欲は高くなっており、特に創作活動・国際交流・自己啓発・ボランティアではその傾向が強い。父親の学歴についても同様の傾向が見られるが、母親学歴に比べると高等学校卒業者と大学卒業者の間の差異は小さい。家庭の文化的環境（文化資本）の格差を是正するには長期的な対応が必要であるが、学校をも含む家庭外での文化的経験の機会と質の保障の課題が浮かび上がっている。

なお、自己診断（Q31）別にみた参加意欲（表2）を見れば、自分らしさがあり、自分の人生に対する責任を自覚し、自身の向上への意欲が強い者が、ほぼすべての活動領域で積極的に参加する傾向がみられる一方で、自分らしさを認めがたく、自己変革への意欲を持ちにくい状況に置かれている者は、国際交流・自己啓発・ボランティアおよび地域活動において極端に低い消極性を占めている。しかし、後者の回答者も鑑賞・自然体験・観光には一定の参加意欲を示しており、ここに活動への参加と他者関係の拡張の可能性があるとみるべきであろう。

図16 暮らし向き別参加意欲

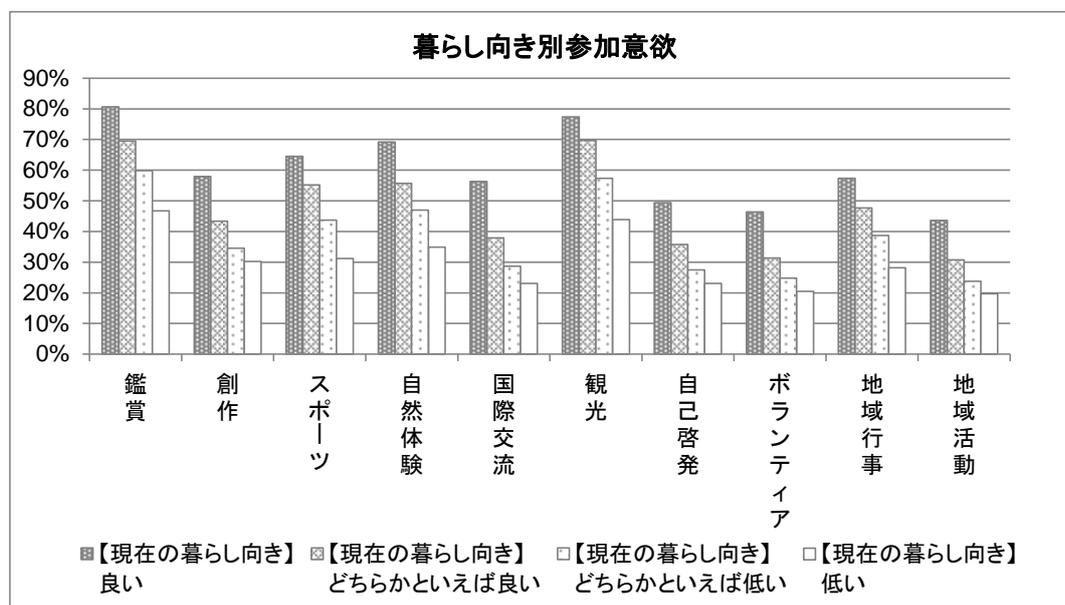


図 17 母親学歴別参加意欲

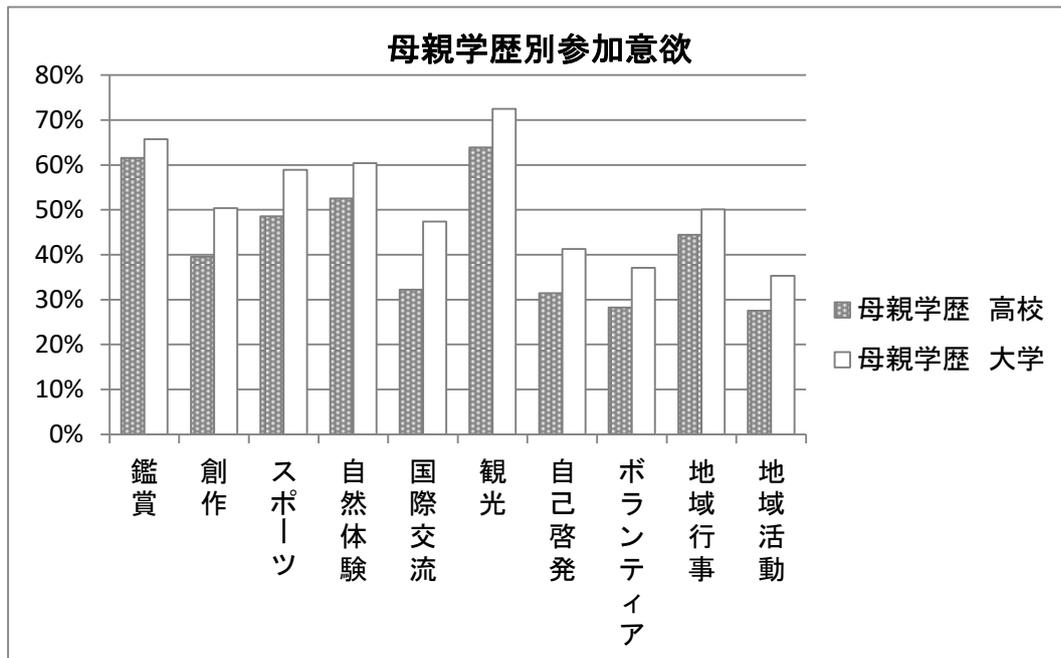


表 2 自己診断別にみた参加意欲

自己診断		鑑賞	創作	スポーツ	自然体験	国際交流	観光	自己啓発	ボランティア	地域行事	地域活動	
自分らしさがある	男性	Total	63.4	39.5	55.6	53.6	36.8	62	34.4	29.7	41.5	31
	男性	あてはまる	76.9	54	65.2	67.5	50	74	46.8	41.6	54.7	41.7
	男性	どちらかといえばあてはまる	69.7	42.7	62.7	59.4	41.1	68	38.9	32.6	46.1	34
	男性	どちらかといえばあてはまらない	47.4	26.2	41	39	22.8	47	19.2	17.7	27	19.6
	男性	あてはまらない	26.2	12.4	19.6	14	7.6	21	8.4	7.6	11.6	10.4
今の自分を変えたい	女性	Total	70.5	45.1	47.8	54.2	37.3	70	35	32.5	49.4	29.1
	女性	あてはまる	80.7	58.5	58.5	64.9	49.7	80	46.1	42.1	60.7	39
	女性	どちらかといえばあてはまる	75.1	47	49.9	56.7	39.6	73	38	34.9	51	30.6
	女性	どちらかといえばあてはまらない	59.8	35.9	40.5	47.1	26.1	62	24.2	25.2	43.1	22.7
	女性	あてはまらない	40.9	16.8	21.4	25.5	14.5	41	11.8	8.2	21.8	6
人生で起こることは結局自分原因がある	男性	Total	63.4	39.5	55.6	53.6	36.8	62	34.4	29.7	41.5	31
	男性	あてはまる	73.2	50.7	65.4	64.9	45.1	72	45.4	39.9	52.9	41.1
	男性	どちらかといえばあてはまる	71.5	45.3	62.7	61.4	44.7	69	40.8	36.3	47.7	37
	男性	どちらかといえばあてはまらない	53.6	30.1	47.3	43.6	25.9	54	23.3	18.6	31.5	21.1
	男性	あてはまらない	29	12	21.3	16.8	10.4	23	9.2	6.4	12.4	6.4
今の自分が好き	女性	Total	70.5	45.1	47.8	54.2	37.3	70	35	32.5	49.4	29.1
	女性	あてはまる	78.4	51.9	54.2	62.4	44.4	79	42.9	40.4	58.4	36.7
	女性	どちらかといえばあてはまる	71.2	45.9	49.8	55.1	38.4	72	34.4	32.3	48.7	28
	女性	どちらかといえばあてはまらない	64.9	38	40.4	46.5	28.7	62	29.1	26.2	41.8	23
	女性	あてはまらない	32.9	19.1	15.8	19.8	11.8	27	7.9	4.6	21.7	7.2

*注：薄い網掛けは 50%を超える回答であり、濃い網掛けは 10%未満の回答である。

4-2 参加の障壁

参加障壁としては、時間・場所・費用が三大要因であるが（表3）、暮らし向きが低くなる場合や職業階層が下位（非正規・無業者）になると、活動内でのコミュニケーションや人間他者関係の質に関する問題が障壁として挙げられる傾向が微弱ながらも認められる。暮らし向きが他者関係や自己認識に影響を与えていたことを考えれば、このような階層にとっての参加障壁を低くするような配慮を行うことも実践的な課題となるであろう。

また、育成支援機関を利用しない理由（表4）をみると、「不安や悩みの解消にならないと思うから」という回答は、暮らし向きが低くなるほど増えている。このことは、育成支援機関が無業者を含めた暮らし向きの低い若者たちのニーズを把握しきれていないことと同時に、活動への参加や支援機関の利用がない場合でも、ニーズがないのではなく潜在化しているにすぎないことをも意味している。

表3 暮らし向き別・職業階層別にみた参加障壁

参加で支障になること		Base	忙しくて参加できない	場所が行きにくい	情報がない	参加する場合に費用等がかかる	積極的なコミュニケーションを求められそう	常連や顔なじみの人で既にネットワークが出来上がっていきそう	同世代の参加者が少なそう	若い世代とその他の世代とのギャップがありそう	その他
暮らし向き	良い	906	60.0	43.5	27.2	36.1	21.5	24.5	21.1	8.4	0.6
	どちらかといえば良い	2985	55.6	46.9	27.1	43.2	28.6	29.6	23.3	10.3	1.1
	どちらかといえば低い	1719	53.4	46.2	28.4	45.8	28.9	29.6	20.8	13.3	1.4
	低い	390	48.2	39.2	25.1	43.1	30.8	28.5	19.0	19.5	3.1
職業	学生	2652	59.8	48.5	27.3	45.6	26.4	28.6	23.2	9.2	1.1
	正規職員	1395	56.8	40.7	26.3	36.9	24.7	26.5	19.9	11.8	0.7
	非正規職員	960	53.3	45.8	28.5	41.6	30.6	30.0	21.1	13.2	0.8
	専業主婦(夫)	431	53.4	44.8	26.0	45.9	25.3	29.2	25.1	10.2	2.3
	無業者	493	31.0	44.6	28.8	44.0	40.0	32.5	19.9	19.9	2.2
	その他	69	55.1	52.2	30.4	46.4	30.4	34.8	26.1	13.0	8.7

表4 暮らし向き別にみた育成支援機関を利用しない理由

		Base	相談するのは家族や先生、友人など身近なの方が有意義だと思うから	新しく得られるものがなさそうだと思う(なかった)から	不安や悩みの解消にはならないと思う(ならなかった)から	他に楽しい場所があるから	知らない人ばかりで楽しめないと思う(楽しめなかった)から	行くのが面倒だから	自分には関係ない場所だと思うから	機関について知らなかったから	その他
暮らし向き	良い	604	33.4	13.2	14.4	19.4	10.9	25.7	30.0	6.3	2.3
	どちらかといえば良い	2107	27.8	9.9	15.5	19.4	16.5	30.7	33.3	7.6	1.9
	どちらかといえば低い	1106	24.3	12.3	19.3	18.0	19.0	35.4	33.4	7.9	2.1
	低い	203	19.2	15.8	29.6	16.7	28.1	38.9	30.0	11.3	3.9

おわりに

若者の自己形成にとって不可欠の条件である豊かな他者関係が保障されている者は、今回の調査による限り、「暮らし向きが良い」（良い＋どちらかと言えば良い）とした回答者（全体の約65%）の7～8割程度と考えれば、全体の約半数程度であろう。そして、その半数以外の者の内部の格差は極めて大きいと言わざるを得ない。種々の他者関係の有無や自己認識・将来の自己像のあらゆる面で、階層間格差は大きかった。

若者の育成支援にあたっては、短期的には豊かな他者関係を築ける活動への参加の可能性を高

めることが必要であるが、長期的にはその背後に潜む構造的な格差を是正する対応が不可欠である。構造的に不利な状況に置かれた若者は、その不利な状況に応じた認識枠組みや評価尺度を形成せざるを得ないが、それらが無意識の内に内面化された社会構造を反映しているとすれば、それらの変革は、社会構造が人生創造の自由を保障するものになりつつあるという社会への期待と希望がないところではなし得ない。育成支援機関における対応は、この短期と長期の視点を結合したものとしてなされる必要がある。